

Changes in Life Experience of Ethnic Minority People in Yunnan: How Lahu villagers have lived the social changes in PRC

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00034578

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



中国雲南省におけるラフ族女性の遠隔地結婚と移動に関する調査報告

堀 江 未 央

私は、2010年春から2012年秋まで、中国雲南省瀾滄ラフ族自治州竹塘郷のラフ族村落P村に住み込み、長期フィールドワークを行ってきた。また、2012年8月1日～9月2日まで、西本陽一教授の科研費の援助をいただいて、湖北省、江西省、河南省、安徽省に婚出したラフ族女性を訪れて調査を行った。これは、その報告である。

1. 問題の所在
2. 先行研究 一女性の遠隔地結婚の背景
3. 調査地概況
4. P村のへパポイの変遷
5. 婚出先の生活
6. まとめ

1. 問題の所在

1979年の改革開放以降、中華人民共和国では急激な経済発展と人口流動の増大と共に様々な社会変化が起こっている。外国人による長期フィールドワークの難しい中国での人類学を志し、ミャンマーとの国境を跨いで分布するラフ族の国境を越えたつながり、そこで生きる営みに関心を思っ雲南省に赴いた私は、ラフ族村落に住み着いてラフ語を学びつつ暮らすなかで、村内に結婚適齢期の未婚女性がいないことに気づき、関心を持つようになった。「ラフの女はへパ（漢族）とポイして（逃げて）しまった Ladhof ma Hiet pal gie phaw-e ol (Lahu ma Heh pa geh hpaw-e o)」、と村人たちは語った。各戸調査をしたところ、P村の在村人口は67世帯246人であったが、これまでに53人もの女性が「へパとポイ」して村を出て行ったとのことだった。話を聞くうちに、どうやらへパとポイするというのは、中国内陸部農村の漢族男性のところにラフ女性が婚出する現象を指すのだということが分かってきた。なぜこのようなことが起こっているのか。女性たちはどのような思いを抱いて、いかにして村を離れていくのか、それによって村にどのような変化が起こっているのか。本報告は、そのような「へパとポイする」ラフ族女性にまつわる調査報告である。これはラフ族の社会変化に関する報告であると同時に、中国各地で起こっている農村女性の遠隔地結婚に関する事例報告でもある。

2. 先行研究 一女性の遠隔地結婚の背景

報告に入る前に、まず中国において女性の流動が起こってきた要因を概観し、それに対して研究者たちがどのような指摘をしてきたのかを整理しておく。

ラフ族に限らず、中国国内において女性の長距離移動が頻繁になり、なかでも結婚を伴う移動が盛んになったのは1980年代以降のことである。これには、それまで人口流動を制限してきた戸籍制度の改革と、慢性的につづく中国の嫁不足の問題が大きく関わっている。中国農村では、男子の跡継ぎを得るための女兒墮胎の風習が古くからあり、独身男子の過剰傾向がかつてから指摘されてきた [姜 2011]。貧しい男性は配偶者を得ることができず、換親婚、転親婚¹や売買婚などの方法で結婚を行ってきたとされる [張 2009]。1949年の中華人民共和国成立以降、それらの結婚の手法は封建的な家父長制の残滓として批判され、1950年には婚姻法が制定されることとなる。ここには男女平等が明記され、女性を家父長制から解放することが目指されるようになった。しかし、1979年の改革開放政策の開始と計画生育政策の施行によって、一对の夫婦が出産可能な子どもが一人に制限されたため、男児の跡継ぎを強く望む漢族社会で産児調節が行われるようになり、男子の過剰は拡大しつつある。さらに、経済成長に伴う婚資の高騰などによって、貧しい漢族農村男性の嫁不足はますます深刻化している。 [原、石 2005]。1980年代の戸籍制度改革は、それまで戸籍によって土地に縛られていた人々の移動を可能にし、農村から沿海部都市への出稼ぎが増大している。そのなかで、漢族農村の若い女性も出稼ぎに参加するようになってきた。彼女たちは「打工妹」と呼ばれ、その一部は出稼ぎ先で出会った男性と結婚するようになったため、出稼ぎに行かず農村に残る男性の結婚難は深刻になるばかりである。

Han と Eades は、安徽省での調査をもとに、漢族農村において男性の嫁不足が増大するプロセスを分析している [Han, Eades 1995]。安徽省では、従来結婚に際して贈与される婚資は、女方親から結婚支度金として新郎新婦に渡されるものが主であった。女性は農業を行わず、家で家事や織物をして暮らすものが多かったという。しかし、1959年から1979年までの集団化の時代に、女性は男性と同等の労働力として認められるようになり、1979年の改革開放と生産責任制の導入によって労働力の確保が各家庭にとって重要になった結果、娘は農業の担い手としての役割を求められるようになった。そして、労働力である娘を手放す代償として、与妻者から受妻者への物的要求が高まり、男方親から女方親に渡される婚資の高騰や婚礼の豪華化が進み、貧しい男性は嫁不足に陥ったというものである。

その対策として、地元では結婚相手を得られない男性が、より貧しい地域へ嫁探しに行くという現象が起こっている。そこにはしばしば仲介者が介在し、女性の誘拐・詐欺・暴行・監禁などがメディアで多く報告されている。Davin は、女性の送り出し地域となっているのは雲南、貴州、四川省で、女性の受け入れ地域となっているのは安徽、山東、河南省であると分析している [Davin 1999]。つまり、西南部後進地域から、沿海部発達地域の後背地である農村への女性の流れがあるということである。不完全な統計であるが、1985～1988年に雲南省から4万6315人の女性が流出したという計算がある [王 1992]。私が調査した雲南省のラフ族村落は、この嫁探しの連鎖の末端に位置していると言える。

中国では、これらの現象は「婚姻流動」「外流婦女」という呼称で研究が進められている。

¹ 換親とは二家間で女性を交換すること、転親とは三家以上の間で女性を交換し合うこと。

それらの研究の多くは社会問題として女性の流動を取り扱い、男性側の嫁不足の要因や、女性の移動のプロセスを類型化して分析し、最終的に政策的な提案を行うというスタイルが見られる [張 1994、何 2008 など]。そこで提案されるのは、主に女性の脆弱性を改善する政府からのサポートや、女性の教育の強化などである。これらの研究は、女性の流動の要因やプロセスについて明らかにしてきたが、送り出し社会の具体的状況に着目したものは少ない。女性の送り出し社会に起こる変化に触れているものでは、近年楊や蔡などが少数民族女性の流出に関する研究を行っている [楊 2008、蔡 2010]。楊は、出稼ぎなど経済目的の移動は少数民族女性の封建的意識を改革し、女性の素質を高めるものとして肯定する一方で、婚姻に伴う流動は従属的で伝統的規範に基づくものとして批判している。蔡は、女性の流出によって民族伝統文化が消失し、家庭が不安定になるなどの悪影響を及ぼすと指摘している。また、本稿の対象民族であるラフ族女性の流出に関して人口統計学的に議論している馬は、漢族とラフ族とのあいだにある男女比の圧倒的な違いがラフ女性の流出を招き、ラフ族の崩壊すら招きかねないと警鐘を鳴らしている [馬 2004]。これらの研究は、女性の移動を社会問題として捉え、移動する女性を被害者、あるいは教育されるべき未熟者として描く傾向がある。

一方、Fan は、広東省での調査を元に女性の結婚と移動について論じるなかで、女性の主体的行動に目を向けている。労働移動では男性よりも悪い条件に置かれた女性たちが、結婚を用いて出身地よりもよい条件の土地に永住権を求めて主体的に行動するという議論である [Fan 2002]。しかし、彼女は女性の従属性や盲目性だけではない主体性を指摘しているが、そこに介在する仲介者や誘拐などの事例には全く触れていない。

先行研究からは、移動する女性たちをマクロな視点から「被害者」として描き出すか、あるいは女性個人の行動に焦点を当て、彼女の主体性を強調するかの二つの傾向が見えてくる。しかし、これらの視点に欠けているのは、移動する女性と彼女を取り巻く状況を、親や親族、仲介者の役割、村に残される未婚男性や未婚女性など、様々なアクターから総合的に捉える視点である。本報告では、このような多角的な視点の必要性を踏まえつつ、研究の端緒として、1980年代まで外部の漢族との接触が少なかったラフにとって、急激に進む漢族との結婚がどのように起こってきたのかを長期フィールドワークから明らかにする。その上で、女性の婚出先での様子を短期調査に基づく一次データから報告する。

3. 調査地概況

ここからは、ラフの人々とP村について簡単に説明し、P村で女性の流出が起こってきたプロセスを明らかにする。なお、これ以降の記述において、ラフ文字表記は中国で用いられているラフ文字（新ラフ文字）を用い、その後ろにタイやミャンマーで用いられるラフ文字（原ラフ文字）を括弧のなかに表記することとする²。

² ラフはかつて文字を持たず、キリスト教宣教師がアルファベットを用いた文字を開発した。その後、中国ではその文字をさらに改正した中国版ラフ文字が用いられている。

ラフは、メコン河とサルウィン河に挟まれた山地一帯に居住する人々である。生業は焼畑耕作と水稲耕作が主で、狩猟民族としても知られる。東南アジア大陸部から中国にかけて国境をまたいで分布しており、人口は、中国国内に 45 万 3705 人 [国家事務委員会経済司、国家統計局国民経済総合統計司編 2004 : 487]、ミャンマーに約 10 万人、タイに 10 万 2876 人³ [石井 2007 : 70]、ベトナム・ラオスに各 5000 人、合計約 66 万 6000 人である。このような国境を越えた分布は、歴史的な断続的南下によって形成されてきたと言われる。本報告の対象である中国国内のラフ族は主に雲南省に集住しており、民族自治県として瀾滄ラフ族自治県、鎮沅イ族ハニ族ラフ族自治県・孟連タイ族ワ族ラフ族自治県・双江ラフ族ワ族プーラン族自治県がある。その他に西双版纳タイ族自治州・紅河ハニ族イ族自治州などにも少数居住している。言語はチベット・ビルマ語族のイ語支を話し、方言集団にはラフナ、ラフシ、ラフニ、ラフシェレなどがある。

3-1 P 村について

次に、私の調査地である P 村について説明する。P 村は、雲南省瀾滄ラフ族自治県の西北部に位置する自然村である。標高はおよそ 1300m で、ミャンマー国境まで約 130 km (バイクで 8 時間)、瀾滄県城まで約 50 km (バスで 1.5 時間) のところに位置する。P 村は、所属する行政村のなかでは他村に比べて標高の低い場所に位置し、かつてタイ族が居住していたと言われる大きく平らな水田がある。1950 年代の集団化の時代に、村より標高の高いところにある公道近くに村全体が移住させられ、その後、再び本村のあった場所に一部の人々が戻っていったため、現在ではふたつの自然村に分かれている。しかし行政上は一つの行政村である。

東南アジア大陸部から中国雲南省にかけて、盆地世界と山地世界の対比がしばしば前提として語られるが、ラフ語にも類似の分類語彙がある。そのカテゴライズのなかで、P 村は盆地と山地の中間地帯のような意味合いを持つ。ラフ語では盆地のことを「ム Meud (Meun) (タイ系言語で盆地を意味するムアンのこと)」と呼び、山地のことを「イエコ Yedqhaw (yeh hk'aw)、(Yed=高くて寒いところ、qhaw=山)」と言うが、P 村の属するところは「ラツ Ladzhid (La tsuh)⁴」の地域と呼ばれる。ラツとは村人の説明によれば、高山ほど寒くないが、文明のある盆地ではないところ、という意味だそう。

P 村の在村人口は 67 世帯、246 人で、全員が戸籍の民族登録上ラフ族である。主な生業は水稲耕作で、現在では陸稲栽培はごく少数である。また、トウモロコシを主に豚や鶏の飼料のために栽培している。1995 年から商品作物としてサトウキビが導入され、出稼ぎをのぞいて P 村で最も大きな現金収入源となっている。それに加えて、おそらく 2000 年代に

³ この数字は、石井が Krom Phatna sangkhom le sasadikan krasuang kanphatna sangkom le khwam mankhong khong manusaya “Thamniap chonbonphwnthisung 20 cangwat naai phrathet Thai P.S. 2545”より作成した図表から引用した。

⁴ 翻訳不明。Paul Lewis の辞書には「La tsuh」は「海」と書かれているが、P 村での用法と意味が合わない。

入ってから、ユーカリ（桉樹）の植林とコーヒー栽培が導入されているが、まだサトウキビほど大々的には行われていない。サトウキビをはじめ、これらの商品作物はかつて陸稲を植える焼畑地だった場所に栽培されており、ハイブリッド米の導入に伴う水稲の収量増加によって、主食の水稲耕作化が進んだ結果と言える。また、1990年代から出稼ぎも増加している。出稼ぎ先は様々だが、西双版納州ガンランバ（橄欖壩）でのゴム栽培がP村からの主な出稼ぎ先のひとつになっている。これは世帯単位で行われることが多く、親世代と子世代が交替でP村とガンランバを行き来するような形態が取られることが多い。出稼ぎの中でもゴム栽培に従事する人が多いのは、その就業形態が識字能力や細かい技術を必要とせず、既存の農業に類似したかたちであるためだそうである。90年代後半になるにつれて、広東省や山東省、北京、上海など遠隔地への出稼ぎも若年層を中心に増加している。瀾滄県政府のHPによれば、P村の2010年度の全村総収入35万元⁵、農民一人あたり純収入は776元であり、貧困村に指定されている。

3-2 P村と周辺民族

東南アジア大陸部から中国西南部にかけて広がる山地一帯は、多民族状況が常態であることが特徴のひとつであり、瀾滄県内にも23の民族がいると言われる。しかし、P村の近隣にはラフ族が集住しており、日常的に顔を合わせる他民族は多くない。唯一、ヘパシュイ Hiet pal shuit/Hiet shuit (Heh pa sho-e/Heh sho-e) と呼ばれる土着漢族がP村の属する行政村内に居住している。ラフの説明によれば、彼らは「漢族だが漢族でもなく、ラフだがラフでもないもの」「逃げられなかった/帰り損ねたもの」と言われる。「シュイ shuit (sho-e)」については、「本物ではないもの」「箒で掃いた掃き残しの塵」というような説明が聞かれた。ヘパシュイと呼ばれている当人への聞き取りによると、彼らは3代~7代前にP村周辺に移住してきた漢族だそうだ。P村の属する行政村内に少なくとも3つの姓があり、私が確認できたのは、湖南省からやってきたという呉姓⁶、瀾滄県の他地域から移住してきた啓姓、出自の分からない羅姓である。彼らはラフと混住して農業に従事し、日常会話ではラフ語を話す。漢族の風習（七月半と呼ばれる盂蘭盆など）を今でも行っている。しかし、病や不調の際にはラフの慣習と同様に精霊「ネ」の慰撫や祖先霊への供儀を行うこともある。多くの者はすでに戸籍上はラフ族になっている。P村のなかにヘパシュイはおらず、近隣村に居住している。P村には、ヘパシュイよりさらにラフ化した漢族「漢族の一族のラフ Hiet pal ceol ve Ladhof (Heh pa ceu ve Lahu)」と呼ばれる人々が存在する。彼らは漢族の風習をすでに行わなくなり、漢語も話せなくなってしまったので「ラフになってしまった Ladhof phier sheul (Lahu hpeh sheu)」と言う。「漢族の一族のラフ」とP村のラフは古くから通婚が行われており、ヘパシュイとは1949年の中華人民共和国成立以降に徐々に通婚関係が持たれるようになっていったようである。

⁵ 1元=約13円

⁶ おそらく明・清朝期の軍事移民及びそれに付随して南下してきた商業移民の末裔と考えられる。

その他に、P村の村人にとって一番身近な買い物場所である竹塘の盆地には、漢族商人が居住している。また、竹塘以外にP村の村人が行く市である上允と西盟にはそれぞれタイ族とワ族が居住しているが、彼らの生活の上で必要な物資を購入する主な市場はやはり漢族商人の住む竹塘の市である。竹塘では五日に一度市が開かれ、漢族商人やタイ族、ワ族以外にも、ハニ族、ラフロメ（ラフの支系のひとつ）などを市で目にすることがあるが、彼らとは特に通婚関係はない。P村のラフは基本的にラフ族同士の結婚が多く、1979年の改革開放以前、通婚関係があったのは土着漢族「へパシュイ」のみであった。近隣に住み、見知った隣人であったへパシュイとのみ民族間結婚を行ってきたP村のラフにとって、1980年代以降、省外漢族との結婚が急激に進んだことは、間違いなく大きな社会変化であった。それは、同じ漢族との結婚であっても、かつては漢族男性がラフ族地域に住み着き、ラフと共に暮らすかたちを採るものであったのに対して、省外漢族との結婚は、ラフ女性が漢族男性に嫁ぎ、村を出て行くということだったからである。

3-3 P村の人々の行動圏と移動

瀾滄県のラフ族は、かつては国境を越えたミャンマーとのつながりが強かったことも指摘しておかなくてはならない。ラフは歴史的に断続的な南下をしてきた人々で、その移動は清朝期の改土帰流や漢族移民の流入、また、キリスト教への集団改宗とそれへの弾圧など、様々な政治情勢と関わってきた。1949年の中華人民共和国成立前後に、共産党政権を逃れてミャンマーに逃亡した者も多かったと言われるが、P村の人々に記憶されているのは、「おなかの空いた頃 Awf meur thad (Aw mui hta)」という言葉で語られる大躍進の時期に起こったミャンマーへの逃亡である。特に1958年～1960年、三年大飢饉と呼ばれた時期には、食べ物に困ってミャンマーに逃亡する者は後を絶たなかったようだ。また、文化大革命のころになると、地主階層の者はつるし上げられて殴られるという噂が広がり、大土地所有者の一家の一部は夜道を急いでミャンマーに逃げた。これらのミャンマーに逃げる行為を、「下の国／南の国に逃げる Awlhawd mudmil -ol phaw-e ve (Awhaw mvuhmi-o hpaw-e ve)」と人々は語る。文化大革命が終わり、1980年代になってからは、ミャンマー側から国境を越えて故郷を訪ねに来る人もおり、国境を越えた往来が1,2度あったという。

このような、国境を越えた逃亡を表現する際に用いられる動詞「逃げる／ポイ phaw-e ve (hpaw-e ve)」が、現在では女性の流出について語るときに用いられることは重要である。つまり、かつては「逃げる／ポイ」する先として想定されていたのはミャンマーであったのが、1980年代以降、北方の中国内陸部農村へ「ポイ」する新たな現象が日増しに増え、逆にミャンマー側にポイする者はほとんどいないという状況が起こってきたということである。これは、国境周辺で生きるラフが、ミャンマーとの関わりよりも中国内陸部との関わりを強めつつあることを示している。これは中華人民共和国に包摂されていく過程として捉えることもできるかも知れないが、事態はそのような単純な構図では語れない。内陸部への「ポイ」は、中国国内の嫁不足という不可避的状況が引き起こしたものである。そ

して、そこでポイするのは女性のみであり、ラフ男性は配偶者を得られないまま村に残される。

4. P村のへパポイの変遷

それでは、いよいよP村での女性の流出の変遷について見ていく。

P村において、女性の流出は、「へパとポイする Hiet pal gie phaw-e ve (Heh pa geh hpaw-e ve)」という言葉で語られる。はじめに、この言葉について説明しておく。「へパ Hiet pal (Heh pa)」とは漢族のことであり、「ポイする phaw-e ve (hpaw-e ve)」とは、逃げる、飛び出すという意味である。ポイという動詞は、上述のように政治・経済的理由で国外逃亡する場合の他に、家出や駆け落ち、叱られた人間が怒ってその場を立ち去る場合、また、恐怖や驚きで魂が身体から飛び出す場合など、様々な場面で用いられる。しかし、「へパ/漢族」という言葉と組み合わせて「へパとポイする」と言われるときには、ラフ女性が遠隔地の漢族男性のもとに嫁ぐという特定の状況を指す。「へパとポイする」は、遠隔漢族地域へのラフ女性の婚出を指す定型句となっている。また、「へパとポイする」と言うときのへパは、瀾滄県内に住む近隣の漢族や土着漢族「へパシュイ」を指さず、あくまで遠くからやってきた人を指す。実際にはそれが漢族でないこともあるが、それらは考慮されない。「ラフの女はへパとばかりポイする」という語りはP村に暮らすなかでしばしば聞かれ、揶揄のニュアンスで言われることも多い。本稿では、このような独特の定型句で語られる「へパとポイする」現象を、以後へパポイという言葉で書き表し、考察していくことにする。

P村のへパポイは、1988年の瀾滄大地震の発生をひとつの契機としている。瀾滄大地震はマグニチュード7.6級の大地震で、瀾滄県内で死者654人を出す大災害であった。当時P村の家屋は土壁・草葺きであったため、そのほとんどが倒壊してしまったようだ。また、当時は屋根裏に米を貯蔵する習慣があったため、その米に押しつぶされて死んだ人も多かったそうである。その地震後の1988年から1989年ごろ、震災で破壊された道路などの復旧工事のためにやってきた漢族労働者がP村近隣の道路沿いに多数住み着くようになった。そこで彼らと接触し、彼らに声をかけられてついでにラフ女性が急増した。瀾滄県内の他の村では、瀾滄大地震より前からへパポイ現象が起こっていたという話も聞かれたが、P村においては地震が大きなきっかけのひとつとなっており、それ以前にへパとポイする女性はほとんどいなかったそうである。この時期にへパポイした者は、親に何も告げずに突然姿を消すことはほとんどで、親は娘を探して慌てふためいたという。この頃にへパポイした女性の一人が2011年の春節の際にP村に里帰りをし、私に語ってくれた話では、「貧しくて嫌になって村を出た。当時はこっそり行くしかなかった」という。

また、1990年代になると、徐々に嫁探しの漢族男性が村の中に出現するようになった。P村に最初にやってきた嫁探しの漢族男性は、公道に一番近い家に住む目の見えない女性と、村内に暮らす足の悪い女性を嫁に欲しいとあって、それぞれ2000元と600元で親が彼女を漢族に渡したそうである。この時期は、P村の男性のなかに出稼ぎを行うものが出てきたこ

ると重なる。ちょうどそれと前後するように、先にへパとポイした女性が実家に里帰りをして、その際に地元の女性を連れて行くというかたちでのへパポイも増加していった。この里帰りの際に、漢族未婚男性を村まで連れてくることも多かったそうである。この時期の特徴は、嫁探し男性の姿が実際に目に見えるようになってきたことだけでなく、父母に対して金銭が支払われるようになったことである。へパポイのピークは2000年ごろで、一年に何人もの漢族が村を訪れ、親に金銭を渡してラフ女性を連れて行くようになったそうだ。当時、女性たちの多くは漢族地域に憧れ、やってきた漢族男性が取り合いになることもあったと女性たちは語る。その一方で、来訪した漢族が容姿などの点で女性たちに気に入られず、女性を得られずに帰っていく例もあったそうである。このころは、娘、親、仲介者、嫁探し男性の思惑が交錯し、それが「ポイ」なのかの解釈が語り手にとってあいまいになっていく時期と言える。

ところが、女性の流出が甚だしいことに危機感をもった公安が、2006年ごろに嫁探し目的の漢族男性の来訪を制限したという。具体的な時期について、行政側からの確認は取れなかったが、複数の人からの聞き取りの内容を付き合わせてみると、おそらく2006年ごろと考えてよいと思われる。現在、私がP村に居住しているあいだにも、村の会議では何度も「見知らぬ外部者がいたらすぐに村長に知らせること。女を買いに来たのかも知れないから」と注意が喚起され、瀾滄県からP村へ向かう道中には検問があり、省外から来たと思われる男性に対しても尋問が行われていた。その結果、公に嫁探し男性自身が村を訪れて女性とマッチングすることがほぼ不可能になり、結果として仲介者の暗躍がより一層激しくなったと推察される。

P村の女性のへパポイの変遷は、図1、表1のようになっている。図1はP村のへパポイ女性の人数を年代で並べたものであり、表1はポイの方法で分類したものである。地震後の1988年～89年にポイした者が最も多く、次のピークが2000年ごろである。その後、取り締まりの強化にともないポイ人数が減少するというかたちになっている。

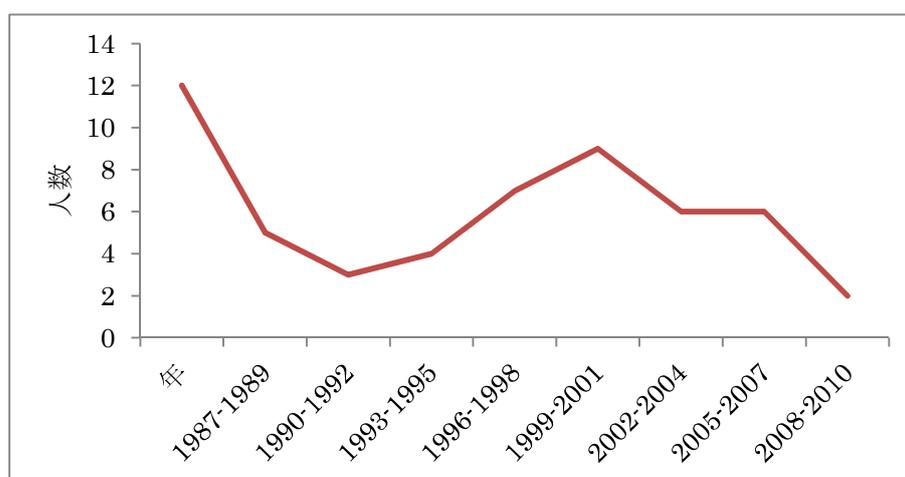


図1 P村のへパポイ人数の変遷

表1 P村のへパポイの方法

瀾滄大地震（1988年）の復旧工事の労働者についていく	6件
女性自身が仲介業者の元に行く（既婚者に多い）	17件
漢族男性が村にやってきて交渉（父母への婚資を伴う）	8件
先に婚出した女性が里帰りの際に友人／親戚の女性を連れて行く	11件
出稼ぎ先で恋愛	4件
だまされて売られる（結婚詐欺、誘拐など）	5件
不明	2件

次に、へパポイ女性の婚出先は以下のようになっている（表2、図2）。

表2 P村のへパポイ女性の婚出先

山東	江蘇	河南	安徽	湖北	湖南	江西	広東	広西	四川	雲南
4人	7人	3人	6人	1人	1人	6人	4人	1人	4人	6人

婚出先の特徴としては、沿海部の大都市に出稼ぎとしての労働力を排出している後背地の農村で、特に男女比のアンバランスが甚だしい地域である〔若林 1996〕。また、雲南省内への「へパポイ」も6人存在するが、これは、一度へパポイした女性たちが婚出先に問題を抱えて帰宅し、次の婚出先として雲南省内を選ぶ場合に多い。

2000年のセンサスによると、ラフ族の男女別全国分布状況は表3のようになっている。雲南省以外の省に住むラフ女性はラフ男性よりも多く、女性の居住が顕著に多い省は、山東省、河南省、江蘇省、湖南省、四川省、重慶市、広東省、浙江省、安徽省の順になっている。



図2 P村のへパポイ女性の婚出先

表3 2000年度 ラフ族の男女別全国分布状況（雲南省除く）

	男	女			
			山東省	69	1334
全国	234144	219561	河南省	88	1063
北京市	9	19	湖北省	8	22
河北省	13	76	湖南省	27	453
山西省	7	28	広東省	26	324
内モンゴ	13	22	広西自治区	38	27
江寧省	6	8	海南省	2	1
吉林省	5	7	重慶市	51	408
黒竜江省	0	0	四川省	59	453
上海市	8	30	貴州省	29	53
江蘇省	29	581	西蔵自治区	13	6
浙江省	17	289	陝西省	1	43
安徽省	29	190	甘肅省	9	1
福建省	4	22	新疆ウイグル自治区	13	15
江西省	1	11			

〔国務院人口普查辦公室、国家統計局人口和社会科技統計司編.2002〕より作成

4-1 どのような女性がへパとポイするのか

張は、江蘇省に婚入してきた女性を対象にした調査をもとに、遠隔地結婚を行う女性には年齢ごとに以下のような特徴があると述べている。20歳以下だと男性自身が連れて行くことが多いこと、21歳～25歳も同様に男性自身が連れて行くことが多いが、これは出稼ぎが関わっていることが多く、出稼ぎ先で知り合った者同士の関係であることが多いこと、26歳～30歳のなかには、結婚紹介広告などを通じて文通して結婚する比率が高いこと（つまり識字者が多い）、そしてそれ以上の年齢になると、女性の友人同士の紹介で、離婚歴や死別歴のある女性が望んで婚出してくるということである。〔張 1994：84〕

しかし、P村のラフの場合、へパとポイする女性と他のラフ女性のあいだに特別な違いは見られないと言っていい。私がP村に居住していたときでも、複数の女性が私の住む地域に「ポイ」したいと相談を持ちかけてきた。どの女性も機会があれば漢族地域に行ってみたいという憧れを持っていると言っても過言ではない。彼女たちのなかには、夫を捨ててへパポイする既婚女性もあり、これはP村では22人となっている。彼女たちは主に夫への不満や貧しさを理由に、自ら仲介者のもとに走ることが多い（既婚者と未婚者の割合は図3を参照）。しかし、経済状況を見ても、親族の多さなどの社会的状況を見ても、特にどの層にあるどのような条件の女性が顕著にへパポイしているという傾向は見られなかった。

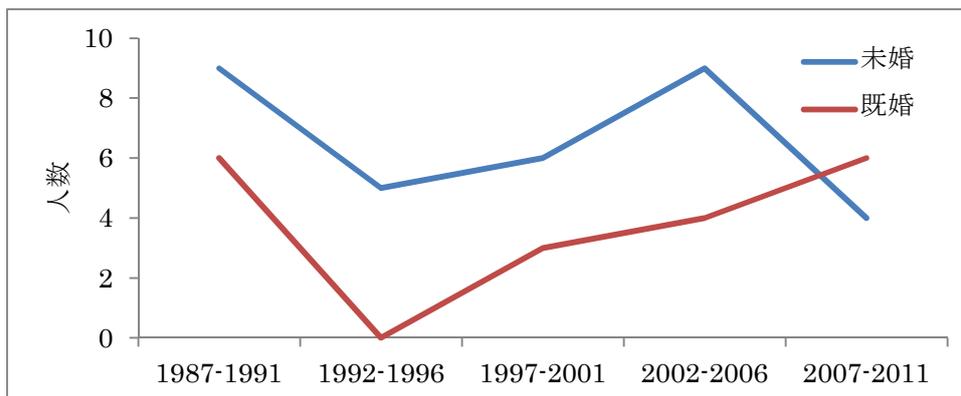


図3 P村における既婚・未婚別へパポイ状況

「へパのくに Hiet pal mudmil (Heh pa mvuhmi)」というのは、ラフにとって特別な響きを持つ言葉である。「へパのくには過ぎしやすい Hiet pal mudmil -ol gawqsha ve yol (Heh pa mvuhmi-o gaw sha ve yo)」という語りは、日常的に非常に頻繁に聞かれる言葉である。「へパのくに」という物言いに具体的な地名が伴うことはほとんどなく、「上方／北方 Nawq-ol (Naw-o)」という方向を指し示す言葉と共に、遠くに漠然と思いつかれており、瀾滄県や近隣の漢族居住地域は「へパのくに」の対象になってはいない。「へパのくには苦しくない Hiet pal mudmil-ol mad kheur ve (Heh pa mvuhmi-o ma hkeu ve)」、「へパのくには農業をしなくても食べられる Hiet pal mudmil -ol hie ngeud mad meur kal awf xa cad ve (Heh pa mvuhmi-o heh ngeu ma mui ka aw g'a ca ve)」という語りは頻繁に語られ、そのようなへパのくに対する肯定的イメージが、へパとポイすることへの憧れを強めている。

4-2. 仲介人は誰か

へパとポイする際には、ほとんどの場合仲介者が介在している。しばしば非識字者で漢語を話せないラフ女性が、単独で省外漢族地域に嫁ぐことは不可能に近い。ラフの人々は、へパポイに関わる仲介者のことを「紹介人 (紹介人) Kaiq shawq pal (Kai shaw pa)」あるいは「女売り／女で商売をする者 Yadmud hawd pal / Yadmud kal te pal (Yami haw pa / Yami ka te pa)」と呼ぶ。ここで指されているのはほとんどが漢族あるいはラフ族の男性仲介者である。町に拠点を持ち、専門に結婚斡旋を行う集団性のものから、出稼ぎ先で知り合った男性を地元の知り合い女性に紹介する個人の小規模なものまで、様々な人が関与しており、それはしばしば階層構造になっている。ここでは便宜上、階層構造の最上部に位置するような、町に拠点を持ち、嫁探し男性に宿泊場所なども提供するような仲介者のことを「仲介業者」と呼び、それより下位に位置する、主に仲介業者のところまで女性を連れて行く、あるいは仲介業者のところから漢族男性をラフ族農村まで連れて行くような役割を果たす者を「紹介者」と呼び分けることにする。仲介業者については、私は直接出会うことがなかったが、P村からへパポイする女性たちは瀾滄県のホテル経営者のところに連れて行かれると

いう話を複数聞いたため、その人物がこれに相当すると考えられる。彼らは、女性を探してやってくる漢族男性に宿泊場所を提供し、ハブとなって女性とのマッチングを設定する存在である。馬によれば、彼らはしばしば地元の役人と結託して、女性が「合法的に」婚出できるような手続きを取らせるのだという [馬 2013]。一方、それよりも下位に位置する紹介者にはラフ男性の関与も珍しくなく、P村だけでも、村に2、3人は女性のへパポイを仲介する男性がいた。これはP村周辺の村でも同じような状況だった。嫁探し男性が父母や仲介人に支払う金額は、かつての2000元から近年の3万元以上まで上昇している。3万元というと大金だが、「現在漢族地域で女性を一人娶ろうとすれば家を一軒建てなくてはならず、特に農村は都市よりも婚出先として条件が悪いためにより一層の婚資の追加をしなければならない。すべての準備や婚資を合わせると10万元はかかる。それに比べると、ラフ女性は非常に安い」(湖北省で、女性の婚出斡旋に関わる漢族男性への聞き取りより)というわけである。そして一般的に、仲介業者や紹介者に対しては、2000元~3000元の仲介料が支払われると言われる。

P村に居住するラフ族男性のなかで、紹介者となっているラフ男性には二つのタイプがある。ひとつは、漢族仲介業者のところまでラフ女性を連れ出すような、仲介業者の末端に位置するタイプである。もうひとつは、自分の親族のなかにへパポイした女性がいる場合、彼女の姻戚関係を用いてへパポイを斡旋するようなタイプである。なお、以下に挙げる例はすべて仮名である。

事例1 李三の場合

P村にいる李三(仮名)は、30代の既婚男性である。彼はシーサンパンナのゴム林で一年の半分程度を妻と弟らと共に稼いで過ごしている。2000年、彼の家のすぐ3,4軒向こうに住んでいる既婚女性が突然いなくなり、李三が漢族に売ったとして村の裁判が起こった。ちょうど稲刈りのころで、行方不明になった女性の娘が生後7ヶ月ほどでまだ授乳しているころのことだった。女性の姑曰く、夫婦げんかもせず、ただ市場に行っただけだったのに、そうして姿を消してしまったという。近所の人によれば、彼女の夫は女遊びが盛んで、結婚初期に妻の実家に暮らしていた際に、妻の叔父の妻と不倫したことがあったという。現在彼女は湖南省にいるらしく、そこでも娘を一人産んだらしい。李三は、ポイしたいという彼女を知り合いの漢族仲介者に送り届けて金を得たとして、村長を通して談判が行われ、2000元の罰金を女性の夫に支払ったそうだ。

このようなケースは、私がP村に暮らすなかで明示的には1人しか分からなかったが、潜在的には誰でも成りうるものである。偶然町で仲介業者と知り合いになり、自分の親戚女性や友人を仲介業者のところまで連れて行くというパターンである。また、P村でしばしば語られる他村のうわさ話では、恋愛をしていた男女がけんかをして、怒った男性が恋人を漢族仲介業者に売ってしまったというような話がある。このような男性は「女売り」と

擲揄されることも多いが、継続的に行われることは少なく、偶然タイミングが重なったときに行われる。

一方、これらの階層構造とは異なるタイプとして、親戚の女性がへパポイしたあと、その親戚女性の夫との姻戚関係を利用して女性を移動させるようなものがある。これは P 村に一人おり、彼は漢族仲介業者のネットワークにはおそらくほとんど関与せず、自らラフ女性を送り込むため漢族地域まで行っていた。

事例 2 チャレーの場合

P 村に住むチャレーは 35 才、既婚で、二人の息子がいる。元地主一族の子孫だが、文化大革命の時代に両親が地主への暴力を怖れてミャンマーに逃亡したため、チャレーはミャンマーで生まれる。1980 年代に、ミャンマーの情勢不安を逃れて家族全員で再び P 村に戻ったが、土地改革が終わった後だったため、彼の先祖の広大な土地はすべて他人のものとなり、貧しい生活を強いられることになった。彼の妹が 2002 年に江西省へへパポイしたのを契機に、2003 年ごろ、チャレーは妹のつてを頼って妹の夫の勤める建設会社に出稼ぎに行った。その際、漢族地域では女性が少なく、結婚に多額の婚資がかかることなどを知り、妹の夫と共にラフ女性を送り出す仲介者となる。自分自身がへパポイ女性を送り届けに山東省や安徽省を訪れていた。

彼は現在 P 村で最も大きな家建て、「妹がへパポイしたから彼の家はあんなに大きくなった」と擲揄される。ここで取り上げた事例はどちらも既婚者だが、未婚男性でこのような紹介者に携わるものも他村には存在するようである。彼らは、ラフは貧しく、漢族はよい暮らしをしているということを繰り返しラフ女性に語り、漢族社会に対する憧れをかき立てる存在である。彼らは得られる報酬のため、また、漢族男性の嫁不足解消のため、そして女性にとってもよい生活を送れることを想定して女性を漢族地域に送り出すが、それが結果的にラフ男性の嫁不足を招き、ラフ社会の崩壊を自ら招いているとも言える。

これらの、主に男性で構成される仲介業者・紹介者以外に、女性のへパポイに重要な役割を果たしているのが、先にへパポイした女性たちのネットワークである。へパポイ女性たちは、婚出先には嫁を得られないたくさん漢族男性がいる現状に接し、また里帰りの際にはしばしば地元女性たちの羨望のまなざしを受け、友人や親族の女性を連れて行く。先駆者女性は、漢語も話せない状態で漢族農村に送り込まれるため、「あともう一人だけでもラフ語で話せる友だちがいればどんなにいいだろう」としばしば感じるようである (P 村で、里帰り中のへパポイ女性への聞き取りより)。一方、後続女性にとっても、見ず知らずの仲介業者によってどのようなところかも分からない男性のもとに嫁ぐよりも、身近な知り合い女性から紹介されて友人の居住地の近くに嫁ぐ方が安心である。その結果、雪だるま式に婚出が続くことになる。その際には、基本的に女性の両親に承諾を取り、漢族男性から親に金銭を渡しての婚出というかたちを取る。へパポイに関わる先駆者女性たちは、

多くの場合、単に紹介だけを行い、嫁探し男性から仲介料をもらわない。安徽省に居住し、女性の紹介をしたことのある女性の話によれば、彼女が里帰りをしたいタイミングか、あるいは漢族男性が嫁探しに行きたいタイミングに、嫁探し男性が彼女の里帰りの交通費を出して、共に彼女の実家を訪れる。そうして嫁探し男性は村のなかを歩き回り、女性の中から嫁に欲しい人を探して交渉する。このような場合、先駆者女性は実家に帰る機会を得、嫁探し男性は嫁探しの機会を得る。そのため、仲介料などは発生しないことが多いのである。そして、興味深いことに、P村では彼女たちは「紹介者」や「女売り」とは呼ばれず、村内で揶揄されることもない。もっとも、このような女性たちのなかにも、継続して女性の紹介をするうちに、徐々に仲介料を求める者も現れ、P村のヘパポイ女性の一人がそのような仲介業に手を出しているという話も耳にした。

P村において、紹介者やヘパポイ女性など、すでに村内の様々な人間がヘパポイにコミットし、ヘパポイへの入り口になっている。それは、一人の女性が誰かに「ヘパポイしたい」と告げれば、必ずどこかの漢族地域へとつながっていくような、複雑に張り巡らされたつながりである。これは、主に1990年代後半から2000年代のヘパポイ全盛期に形成され、携帯電話の普及に伴って発達していったものであるが、2006年の嫁探し漢族の来訪制限以降、ますますその役割を強めていると考えられる。

5. 婚出先の生活

女性たちは、漢族社会には毎日農業をしなくてよい素晴らしい生活が待っていると考えているが、実際に嫁ぎ先に待っている生活は彼女たちの理想の通りなのだろうか。張は、中国国内の女性の移動は水平移動であると述べているが、これはすなわち婚出元と婚出先のあいだにそれほど経済的格差がないということである [張 1994 : 9]。しかし、女性たちがそのことに気づくのは、結婚を決めて村を出て、列車に乗り、遙か彼方の漢族農村に到着したあとのことである。本章では、実際にポイしていったラフの女性たちが婚出先でどのような暮らしをしているのか、P村と婚出先との様々な文化的ギャップとどのように付き合っているのか、2012年8月に行った一ヶ月間の短期調査で得られた情報から報告する。

婚出先での生活を知るために、P村で親しくしている友人の姉妹や娘たちを訪れるかたちで短期調査を行った。私が出会うことのできたのは、湖北省で出稼ぎ暮らしをする三妹 (31歳)、江西省で漢族夫の実家に暮らし農業を行うナテー (32歳)、ナテーの姉で、河南省信陽で農業をして暮らすナロ (40歳)、安徽省に暮らすナウー (31歳)、ナヨ (31歳)、ナミ (29歳) の6人である (すべて仮名)。彼女たちは、1998年～2002年にヘパポイしており、当時の特有の背景と共に事例を位置づける必要があることにも留意しなくてはならない。当時、P村一帯には年に何人もの漢族男性が村を訪れ、女性たちがヘパポイへの憧れを最も強くした時期であった。また、ヘパポイに際して親に金銭が支払われることが多い時期でもあった。後述するが、この時期にヘパポイした者の中には、村を離れる際にラフ式の婚礼の簡略化したものを行ったり、漢族男性と共に家族全員で瀾滄県まで行き、食事会を行

ってから送り出したりする例もあった。ここで紹介する事例が、へパポイ初期の状況や、2006年以降のへパポイの状況とは異なることに留意した上で、女性たちのライフストーリーとして記述しておくことは重要であると考え。

上記の6人の他、安徽省ではP村以外の村から婚出した3人のラフ女性に出会えた。残念ながら、彼女たちに対しては十分な時間を取ってインタビューを行うことはできなかったが、彼女たちも合わせると、出会えたへパポイ女性は全部で9人である。なお、会話はすべてラフ語で行われ、話を聞かせてもらった女性のうち上記の6人に関しては、私が漢族のくにに暮らすラフ女性がどのような暮らしをしているかを知るためにやってきたこと、その内容を文章に書くであろうことを伝えた上で話してもらったものである。

5-1 へパポイの方法について

まずへパポイの方法についてであるが、この調査で出会った9人のうち6人が、友人女性が連れてきた漢族男性と村でマッチングを行っての結婚だった。彼女たちはすべて安徽省に居住しており、それぞれ先にへパポイした者が里帰りの際に友人を紹介するという方式だった。その意味で、安徽省は他の事例とは異なる。そのほか、湖北省で出稼ぎ暮らしをしている三妹は、仲介業者が連れてきた漢族男性とP村でマッチングをして、その男性についていくかたちでへパポイした。河南省信陽に居住するナロは、へパポイする前にラフの男性と結婚して子どももいたが、夫の暴力や飲酒に耐えかね、隣村のラフの紹介者について自ら村を出て行くという方法でへパポイした。また、彼女の妹ナテーは、初等中学卒業後出稼ぎに行き、出稼ぎ先で親戚のへパポイ女性三妹に紹介された漢族男性と結婚するという経緯を経ている。

彼女たちのうち、離婚歴がある人は2人、また、へパポイ当時両親のうち片方が死亡していた人も2人いた。

5-2 戸籍・結婚証について

へパポイの際に、通常の結婚のように戸籍の移籍手続きや結婚証作成手続きを行っているかどうかは重要である。戸籍は、医療保険の適用や子どもの戸籍登録手続きに必要であるし、結婚証がなければ子どもを出産することはできない。しかし、P村からへパポイする女性のなかには、親が娘の行く末を心配し、戸籍を夫方に渡さない事例が多く発生している。これは、P村からへパポイしたのち、漢族夫とのあいだに問題が生じて逃げ帰ってきた女性が、夫方に戸籍を移籍してしまったり取り戻せない事態が発生したからである。今回の調査で出会った9人については、9人中2人が戸籍を夫方に移し、それ以外の7人は生家に置いてある状況であった。P村のへパポイ女性全体で見ると、夫方に戸籍を動かした人が10人、生家に置いてある人が21人、帰ってきて再婚し、現夫宅に置いてある人が4人、不明19人という内訳になっている⁸。

⁸ P村では、戸籍簿を家に置かず、しばしば行政で一括管理していたため、すべての戸籍簿を見せてもら

また、結婚証についても、作成していない人もいることが分かった。本来結婚証の作成には男女両方の戸籍簿を必要とするが、結婚登記機関に知り合いがいて手助けする、結婚証を作る際に若干のお金を支払うなどの手段があれば、いくつかの書類は省略できるそうだ。調査で出会った9人のうち、結婚証を作った人が6人、作っていない人は3人だった（表4）。作っていない人のうち2人は、まだ国家の規定する結婚最低年齢に達していないためである。また、結婚証を作った6人のうち、2人は婚出先ではなく雲南省で結婚証を作っている。これは、父母が婚出先で結婚証を作ることに「安心しなかったから」だそうだ。

ここから分かるのは、ヘパポイ女性は、戸籍は動かさないが、結婚証は作る傾向にあるということである。これはおそらく、新生児の戸籍手続きに結婚証が必要であるためだと考えられる。中国は計画生育政策によって、婚外子の出産を厳しく規制しているため、結婚証のない夫婦から生まれた子どもには罰金が課される。聞き取りのなかでは、結婚証を作成したのは子どもを出産したときか、子どもが就学年齢に達した際だった、という話を複数聞いたが、これは子どもの戸籍を作るために必要となったからであろう。

表4 各女性の婚出年と行政手続き（結婚証、戸籍の移籍）の有無

名前（仮名）	ポイ年	生年月日	嫁ぎ先	結婚証	戸籍
三妹	2002	1981	江西	×	生家
ナテー	2005	1980	江西	○	夫方
ナロ	2000	1970	河南	○	夫方
ナウー	1999	1981	安徽	○	生家
ナヨ	1999	1981	安徽	○（雲南）	生家
ナラ	2007	不明	安徽	×	生家
ナミ	1999	1983	安徽	○（雲南）	生家
ナファ	2007	不明	安徽	○	生家
ナク	2007	不明	安徽	×	生家

5-3 漢族にとって「雲南女性を嫁にもらう」とはどのようなことか

漢族の結婚は、そもそも紹介婚が多い。自由恋愛による結婚の割合が多いと言われる都市部でさえ、見合いが58%に達すると言われる [陳 2008: 190]。特に農村では、媒婆／媒人と呼ばれる仲人による結婚相手の紹介が現在でも一部行われている。私が調査のなかでラフ女性と話していても、彼女の夫の親戚や近所の人々の結婚に際してそのような紹介婚の方法が採られているという話をしばしば聞いた。結婚紹介のプロセスには、「見面」という、男性方が料理や酒を用意して女性方を招待し、そのとき男女が初めて出会うというのがしばしば行われており、それで二人が合意すれば婚資が渡され、婚礼手続きが始まる。

うことはできなかった。

江西省で、ナテーとの会話：

「ここ（江西省）には今でも媒婆⁹がいたりするんだよ。媒婆じゃなくても、誰でも友だちなどに「どこかにいい女の子はいないか」というのはよくある。夫の叔父の息子もそうして知り合った女の子と、訂婚（婚約）もして礼金も渡したのに、そのあと女側から断ってきて、礼金も返ってきたとか。……男方は、近所の女は高くて心配、遠くの女は逃げないか心配なんだってさ。」

つまり、仲介者を通じて女性を紹介してもらうことも、面識のない女性と結婚することも、漢族にとっては一般的な結婚のプロセスのひとつであったということである。しかし、遠隔地女性を嫁にもらうと、女性の逃亡やブローカーと結託しての詐欺などが起こる危険性も高く、「外の女は安いがリスク」[Han and Eades 1995: 857] と認識されているようである。遠隔地女性の結婚にしばしば誘拐や詐欺など犯罪的要素が関わることから、現在ではそれに関与した人がすべて処罰されるという規定があり、嫁探しの人々もそのことについては承知している。しかし、それでもやはり雲南省の女性は貧しい地域から来るよく働く女性だと認識されているようで、私を雲南出身だと誤解した複数の漢族女性に、雲南の女性はよく働くのでうちの息子のところへ嫁に来ないかと声をかけられることがあった。

5-4 漢族地域での暮らし

今回の調査で明らかになったのは、ヘパポイ女性のなかにも、夫の家になんと住んでいくだけでなく、出稼ぎに行く者が多いということである。私が出会った女性たちはすべて出稼ぎ経験者であった。子どものないうちは漢族夫と共に出稼ぎ先で過ごし、子の就学時期になると夫宅に戻ってくるというパターンが多く見られた。これは、出稼ぎ先で就学させると学費が高いためである。後述する事例で述べていくが、女性の居住形態は、出稼ぎ先で夫と子と共に暮らす人が 1 人、夫宅で夫と子と共に暮らす人が 2 人、夫宅で夫と子と舅姑と暮らす人が 5 人、夫が出稼ぎに行き、子と二人で夫宅に暮らす人が 1 人だった。

私が訪れた時期は農閑期で、どの家でもラフ女性は時間に余裕のある生活を送っていた。朝起きて庭掃きや洗濯をし、子どもと夫の食事を作り、夫が仕事に出かけ、子どもが学校に出かけたあとは、家でテレビを見たり編み物をしたりして過ごす。昼ごろに再び食事を作って、帰ってきた子どもに食べさせ、その後夕方までは近くの菜園の様子を見に行く、友人宅に麻雀をしに行く、友人とおしゃべりをするなどして過ごす。夕方 4 時ごろになると家に帰って夕食を作り、食後はテレビを見て就寝、というかたちだった。私が訪れた江西省、河南省、安徽省では、どの地域でも農繁期は年に 2 回あり、麦の収穫と田植えの時期、そして稲刈りと麦の種まきの時期である。麦の種まき以外はすべて労働力や収穫機を雇用する形を取り、ラフの地域で見られるような相互扶助は見られないようだ。「漢族はラフのようにみんなでやらず、自分でやる」とすべての女性が語った。農薬を多用するため、この時期以外は特に何もする必要がないのだそうだ。

⁹ 結婚仲介を生業とする女性のこと。

それでは、以上のような概観の上で、彼女たちがどのようなプロセスを経て漢族の村に嫁いでいったのか、そしてそこでどのような暮らしをしているのか、彼女たちとの会話のなかから見ていきたい。ここでは、語りを文章に書いてもいいと了承をもらった 4 人を取り上げることにする。

事例 1 漢族夫と共に湖北省で出稼ぎ暮らしをしている三妹（31 歳）の場合

三妹は、私が P 村でお世話になったホストファミリーの娘で、ヘパポイ女性のうち私が最も親しくしている人のひとりである。彼女が 2012 年の春節に里帰りをした際に、P 村で知り合った。三妹が漢族地域に婚出したのは 2002 年で、2012 年の時点で 31 歳、漢族夫は 40 歳すぎで、二人の間には娘が二人いる。ヘパポイののち、2,3 回里帰りをしたことがあるそうだ。五人兄弟の末娘で、二人の兄と二人の姉はすべて P 村とその周辺に住んでいる。

三妹は、ヘパポイする以前に他村のラフ男性と恋愛結婚していたが、その男性の姉の住む遠くの土地で農業をして暮らそうと言われたのが嫌になり、2002 年当時実家に戻っていた。そこへ、漢族仲介業者に連れられて現在の漢族夫がやってきたので、村でのマッチングを経てヘパポイするに至った。その際 6000 元が両親に支払われたそうである。両親は当初ひどく反対して、父親は漢族夫に「今すぐ帰れ」と怒鳴ったのだそうだ。三妹の夫は建築業を営み、現在では建材の調達を管轄する老板になっている。彼女を訪ねて湖北省に着いたとき、私を迎えに来てくれた三妹の夫は、雲南のような遠いところから女の私が一人で湖北省までやってきたことを褒めながら、バスのなかで以下のように語ってくれた。

「(堀江：どうして三妹と出会うことになったのですか?) 深圳で出稼ぎをしていた頃に知り合った人の叔父の妻が雲南人だというので、「雲南は女性を探すのが容易だ(雲南找姑娘容易)」と言われて探しに行った。瀾滄では小鐘という男性に出会い、その男性と P 村の女性が親しくしていたため、そのつてを使って三妹を知った。瀾滄は飯も満足に食えないほど貧しいところで、食事も慣れない。我々是一日に三回食事を取るが、ラフ族は一日に二回しか食べない。午後の三時くらいに食事をしたら、そのあと夜も何も食べない。とにかく生活の苦しいところだった。」

のちに三妹から聞いたところによると、彼は、三妹と結婚する以前に彼の出身地である江西省の女性と結婚経験があり、二人のあいだに息子が一人いる。しかし、夫の出稼ぎ暮らしが長くなるにつれて妻との関係がうまくいけなくなり、離婚に至ったそうである。そのとき彼はまだ 28 才だったので、もう一度結婚したいと考えていたのだそうだ。彼の息子は 2012 年の調査時には 20 歳を過ぎ、父親と共に建築現場での仕事に携わっていた。三妹のことは母とは呼ばず、「阿姨(おばさん)」と呼ぶそうだ。

三妹一家は、三部屋あるアパートをひと月 500 円で借りていて、そこに住んでもう三年になるという。白いタイルが床に敷き詰められて、小さいながらも清潔な家だった。出稼ぎ暮らしでいつ移動するか分からないということで、荷物はすべてたくさんのスーツケー



図4 三妹の暮らし a 三妹の暮らす町並み b 三妹の家の様子

スに入れているのだそうだ。漢族夫と前妻との子である息子は同じアパートには住まず、他の場所にもうひとつ部屋を借りているので、三妹の住む家には三妹と漢族夫、そして娘が住んでいる。現在三妹には二人の娘がおり、長女は10歳で小学校に通っているのだ。ふだんは姑の暮らす江西省に住んでいるそうだ。出稼ぎ先での通学は面倒が多いからである。しかし、私が訪ねたときにはちょうど夏休みだったため、長女も両親のところに遊びに来ていた。三妹の夫は現在大きな商業施設を建設中で、それが終わるまではずっと湖北省にいらるだろうとのことだった。三妹は、かつては夫の建築現場で労働者に食事を出す炊事の仕事をしていたこともあるそうだが、2011年に次女を出産したため、子の世話をしながら家で過ごしていた。

以下は、三妹のアパートでの、私と三妹との会話である。

「(堀江：ここに住んで何年になるの?)へたと結婚したあと、深圳から浙江に行って、そこに3,4年いた。それからそのあとは今の湖北に。深圳に最初に行ったときは、工場みたいな広いところに寝床をたくさん並べて男ばかり寝ていてびっくりした。(堀江：怖くなかった?)怖くはなかったよ、他にも夫婦連れの者もいたし。でも私は言葉も分からないし、しばらくのあいだ一言も話さずに、話しかけられても返事もできずに、そうして暮らしていたので、言葉が話せない障害があるんじゃないかと思われていた。もしそのとき(実家に)連れて帰ってくれる人がいたら帰っていただろう。その後、長女を産んで、病気になって(江西の夫の実家に)帰宅した。そしたらまあ、急斜面の谷底みたいなところに住んでいて、家は瓦屋根の煉瓦造りで、まるで地震前のラフの家みたい。一分一秒もここにはいたくない、と夫に言った。...漢族のくには、平らで市場もすぐ近くにあるようなところだと思っていたし。

家を出た後すぐに出稼ぎ先に行って、夫の実家にはすぐには行かなかった。舅姑たちにも長い間会ったことはなかった。(堀江：じゃあ三妹と結婚したことも知らせてなかったの?)自分の息子が雲南の女を連れてきていることは知っていたんじゃないかな。

(堀江：姑や舅はどんな人だった?)姑は怒らない人、舅は見たところ心/性格がよくない(Nidmad mad

dar (nima ma da))。彼の一族は誰でもみんな性格がよくないみたい。でも私はほとんど家には住まず、出稼ぎ先にばかり住んでいるのでよく知らないけれど。……夫は老五（五番目の息子）。私が（夫の実家に）行ったときには、夫の家は一つの家にしきりがあって、その向こうを老大（長男）に分けたことになっていた。四男はすでに自分の家を造って出て行ったあと。次男は婿に行つて、公道沿いの家に住んでいる。外の女を嫁にもらったのは私の夫だけ。私以外はみんな江西人と結婚している。

……前は（三妹の）長女を連れてここ（湖北）で勉強させていたが、移動することになって大変で江西に行かされた。舅はもう死んでしまい、今では姑だけが家にいるので、（三妹の長女と姑の）二人で暮らしている。長女は小学校に上がるときに戸籍を作った。次女に対してはまだ何もしていない。」

三妹は、漢族夫とのあいだに結婚証の手続きや戸籍の移籍手続きなど何も行っていないそうだ。死ぬときは親戚もなくこんなところで死ぬのか、と考えたこともあるという。近年、へパポイした女性のなかにも、「へパのくに」が期待したほどいいところではなかったことを理由に実家に逃げ帰ったり、もっと条件のいい嫁ぎ先に再びへパポイしてしまったりするケースが増えていることについて、「私は自分で来たくて来たので（いいけれど）、人に売られてきた子なら、子どものことなどそんなに可哀想ではなく、子どもを捨てて逃げ帰ることもあるのでは。」と話してくれた。三妹は、私とラフ語で会話するなかで、「あなたみたいにラフ語で話せる友人があと一人いたらいいなあと思う」という。湖北省の出稼ぎ先でラフ女性に出会ったことはないそうだ。しかし、「夜は近所で女性たちがダンスをしているのを見に行くこともあるし、たいくつはしない」とのことだった。

三妹の周辺にはラフ女性はいないが、漢族夫の出身地である江西省の村にはもう一人ラフ女性がいるらしく、それは三妹の夫が斡旋したものだそうだ。三妹の夫は、三妹の兄とともに一時期へパポイの紹介者をやっていたことがある。しかし、「最近では女性を連れてきてもしばらくすると逃げ帰ってしまつてばかりで何の稼ぎにもならない。紹介者がしかられるし、面倒なことばかりだ。」といて、現在は行っていないらしい。

事例2 ラフ夫の暴力を逃れ、娘を一人連れて河南省信陽へ行ったナロ（40歳）の場合

ナロは、三妹同様に、へパポイ以前に結婚経験のある女性である。彼女はラフの前夫と12年間暮らし、二人の娘を生んだが、夫がアヘン中毒でしばしば暴力をふるうことに耐えられなくなって2000年にへパポイしたそうだ。現在の漢族夫は48歳で、彼と共に暮らすすでに12年になるそうで、「どちらの夫とも12年、人の妻をやつてこんなに長く経ってしまったよ〜！」と感慨深く語る。彼女はラフ夫とのあいだに生んだ二人の娘のうち、次女を連れて逃げている。現在漢族夫とのあいだにも息子が一人生まれたため、二人は姉弟として暮らしている。娘は17歳、息子は10歳である。娘はほんの少しラフ語を聞き取れるが、話すことはできないそうだ。私がナロの家を訪れた際は、夏休みだったので二人とも家にいた。その他、ナロの夫の父親が共に暮らしていた。

へパポイの経緯について、ナロは次のように語ってくれた。

「前の夫はアヘンもやるし、農業をきちんとしないので嫌で、離婚しようと何度も思ったけれど、姑と舅に止められて…。へパのくに行かないか、と隣村のラフの男に言われ、朝夫が農作業に出て水牛を放牧しに行ったあと、その男の用意した車に乗って出た。友人の女の子といっしょに。長女は学校に行っていたから連れて来られなかったけれど、お乳を飲んでた下の娘は抱いて出た。瀾滄に着いて、夫が探しに来ているのが扉のすき間から見えて、慌てて隠れてやりすごした。その後、私を連れて出た隣村の男は夫に見つかってひどく殴られたようだった。…村から町、町から県城、県城から河南、と女売りが何人もいて、最終的に河南省で漢族が金を払うまではそいつらに金も分配されない。……河南に来た後、先にポイしていたラフ女性の家にしばらくいた。(堀江：漢族夫はどうしてあなたのことを知ったの?)今の漢族夫の妹がその村に住んでいて、ここに雲南女性がいると私の夫に伝え、そうして彼が見に来た。……一緒に(河南に)へパポイした女の子はみんなヤミハ(未婚女性)で、彼女たちから先に(売られて)いった。しばらくして、私のお腹に手術跡がないのを人が知って¹⁰、子どもが産めるというので、今の夫の姉が私を見に来た。それより前に見にきた男性は、娘はいらない、私だけなら要ると言ったので、娘と一緒にでないと行きたくないと言った。今の夫は、娘も一緒にいいよ、といったので。自分は4000元だったらしい。他の女の子のなかには一万元や6000元の子もいた。」

河南省は、ラフ女性が雲南省以外で最も集中して居住する地域のひとつで、なかでも信陽という地名はP村の人々ですら地名を知っている有名なへパポイ先である¹¹。しかし、意外にもナロは他のラフ女性がどこに住んでいるのかほとんど知らなかった。唯一近所に一人ラフ女性が住んでいたそうだが、数年前(おそらく2009年ごろ)に、その女性の妹と電話で連絡しあって他の地域に再びポイしてしまったらしい。「(自分が河南に)来たときはラフの友だちがいたから、へパの言葉も分からないし、彼女の所にばかり遊びに行ったけれど、(彼女が)ポイしてしまって、心が痛い。自分は文字を知らないのでポイできなくて。」と語ってくれた。その他には、彼女が河南省にやってきた際に一緒だった女性たちとはかつては連絡を取り合っていたようだが、携帯電話番号の変更などのため、現在では音信不通だそう。ナロは漢字を全く書けないが、P村にいた頃ラフ文字を学んだことがあるので、彼女の小さな手帳には友人や家族の名前がすべてラフ文字で書き込まれていた。日常的にラフ語を話す機会が少ないため、ナロは私と会話する際にもしくはらくはラフ語がうまく出てこないようだった。

ナロの住む村は平地が続く広大な農村地帯で、ナロー一家は水稲、麦、トウモロコシ、落花生を栽培して暮らしている。農地が広く、「作物は売るもの、とても全部自分たちだけでは食べきれない」とのことだ。私が訪れた8月中旬はちょうどトウモロコシの収穫の開始時期だった。トウモロコシを収穫したら麦の種まきを行い、10月頃から2,3ヶ月の農閑期には夫は遠くに出稼ぎに行き、春節の頃に帰宅するそう。その後、3,4月の麦の収穫期ま

¹⁰ 中国の一部の地域では、出産規定人数を出産した女性は輸卵管結紮手術を行うことが義務づけられている。雲南省瀾滄県でも義務づけられているが、ナロは二児の出産後も手術を行っていなかった。

¹¹ P村の人々は、娘や親戚のへパポイ先の地名をきちんと覚えていないことが多く、単に「へパのく」と言うか、あるいは広東、安徽、など省レベルまでしか記憶していない。



図5 ナロの暮らし

a ナロの住む村の入り口

b ナロの家

c ナロが婚入した際に写真館で撮影した写真。ナロと漢族夫、ナロの娘の三人で。

では再び出稼ぎに行く、という生活をしているようだ。落花生畑は5~6畝¹²、トウモロコシは20畝くらいで、それらの収穫を売るだけで毎年2万円くらい得られるらしい。そこから肥料や種代などを引くと、おそらく半分の1万円くらいが年収になるようだ。

ナロは、彼女の暮らす地域でどのような男性が結婚相手として条件がいいのかを教えてくださいました。

「この人は結婚するとき、男性の父母が健在かどうかばかり尋ねるものだ。姑がいると、結婚後も苦しくない。何でも舅姑がやってくれるし、食事を用意してくれる、子どもも、授乳したあとはただ姑に渡してしまえば、服を洗ったりおしめを替えたり、すべて年寄りが面倒を見る。出稼ぎに行くにもそうする。漢族の嫁をするのは、ラフとは大違い。ラフは水を汲んだり、食事を作ったり、年寄りの面倒を見なくてはいけない。私の（漢族）夫は母親がなくて、家もよいものに立て替えていなくて、「本事（才能、腕前のこと）」がないので出稼ぎをして稼いで帰ってくるわけでもないし、嫁は得られなかった。自分が来た当時、

¹² 1畝=約6.67アール

この家はなんて貧しかったんだろう！！他の人はみんな大通り沿いにできた新しい家を買っている。私が来た後に少しずつ苦勞して、今は畑を耕すトラクターもあるし、洗濯機もある。」

ナロの漢族夫は兄一人、妹一人の三人兄弟で、母親は大昔に死んでしまったらしい。現在ナロの夫が父親の面倒を見て共に暮らしており、兄は出稼ぎに出てほとんど村にいないそうだ。この村には、若者が出稼ぎに行き、若者の親世代が孫を育てながら村に残るといふ形態が非常に多く見られた。

あとから分かったことだが、ナロと娘、そしてナロの夫は、ナロが河南省に来て間もないころ、公安につかまって拘留されたことがあるそうだ。それは、「人身売買に関与した者は誰でも処罰の対象になる」という規定が近年ではあるためである¹³。ナロは、「本来なら自分や娘まで拘留されるはずはない。金が欲しくて捕まえただけだ」と憤っていた。ナロの夫の親が保釈金を 1000 元ほど出して、一週間ののちに釈放されたそうだ。

ナロは、現在では戸籍も結婚証手続きもすべて済ませてある。戸籍については、当初夫から実家まで取りに帰れと言われたそうだが、そんなことができるわけもなく、結局 1000 元ほど出して作ったそうだ。連れてきた娘も、全員の戸籍が現在河南省にある。

「へパのくに」はどんなところか、という私の質問に関して、ナロは以下のように答えてくれた。

「へパは市場でものを買って食べる、そうして暮らしているとばかり聞いていたけれど、違ったね～。どこでも同じだ。持てる者は持っていて、ない者はない。どこも同じだね。へパのくにはだれでもハイヒールをコツコツさせながら歩いていると聞くと、なんて行きたいんだと思ったものだったよ。」

一方で、ラフよりもへパの方が豪華だ、という話は年越しなどの節日に関して語られた。

「年越しのときも、父母には六種、親類には四種の贈り物（豚肉、飲料など）がないと訪ねることはできない。ラフのようではない。ラフは餅を少し持って行けばそれでいいだけだけれど。」

ナロの前夫が暴力的であったのに対して、現在の漢族夫はナロに暴力をふるうことはないそうだ。「夫婦なのだから、少しは言い合いや喧嘩することもあるけれど、夫は私を殴ることはできない。殴ったら私が逃げてしまうことを怖れているから」とのことだ。この地域では小麦食と米食が混じっており、マントウを手作りして食べる習慣があるが、雲南で米食しか経験のないナロにはそれがうまくできず、夫がしばしば作ってくれるのだそうだ。彼女の実家である P 村の現在の暮らしぶりをナロに伝えると、「そんなに良い暮らしになったのなら帰ってみたいなあ」と言うので、「ここにラフの友だちもいないのなら、もう家に

¹³ 1991 年の第七回人民代表大会で、誘拐犯罪の売り手だけでなく買い手にも三年以上の禁固刑を科すことが決定されたそうである [Han and Eades 1995: 866]

帰ってしまったら？」と聞いてみたところ、ナロは笑いながら「村のどこに私の住むところがある？父母の家に住む？そんなことはあり得ない。ただちょっと見に帰るのでないかぎり。」と語った。

事例3 出稼ぎ先で、へパポイ女性に紹介された人と結婚して江西省に住むナテー (32歳)

ナテーは、事例4で述べたナロの妹である。彼女は、彼女の年代には珍しい初等中学卒業生である。彼女の兄が町で学校の先生をしているため、兄と共に町で学校に通っていたそうだ。卒業後、出稼ぎ斡旋の業者に連れられて1999年から広東省に出稼ぎに行き、その時の出稼ぎの収入一万元を実家の改築費として送金したそうだ。

その後、2005年ごろに、江西省にへパポイしていた友だちと電話で連絡を取り合い、江西省の男性が彼女に興味があるというので電話番号を交換し合って連絡したそうだ。そうして何度か写真を送り合って、2005年に彼の実家を訪れ、結婚するに至った。実家の家族には出稼ぎをしているとのみ伝えてあったので、出稼ぎ先への電話も手紙も音信不通になり、家族はとても心配したそうだ。その後、2006年には長男が生まれたので、長男と夫を連れて実家に里帰りをし、その際彼女の母親に「へパのくにを見せてやろうと思って」夫の家に連れて行ったのだそうだ。母親は、ナテーの姉ナロの家とナテーの家に合計6ヶ月住んで、そのあとP村に帰ったそうである¹⁴。ナテーには現在息子が二人いる。江西省では男児は一人しか出産できないため、次男に対して5000元の罰金が課されたそうだ。漢族夫はナテーより二歳年上で、工事現場で建築の仕事をしている。ひと月に2000~4000元ほどの収入になるそうである。また、漢族夫の両親は二人とも健在で、毎朝ナテーよりも早く起きて庭を掃き、朝食の粥を用意していた。

ナテーの住む江西省の村は、周囲に森があつて、公道から離れて森のなかをしばらく進むと見えてくる。村内には、平屋で土壁・瓦屋根の古い家屋と、赤煉瓦で立てた2~3階建



図6 ナテーの暮らし

a 古い平屋と高層の家屋が入り交じるナテーの村 b 建設中のナテーの家

¹⁴ このように、娘のへパポイ後、娘の婚出先を訪れた経験を持つ親はP村に複数いる。

ての家屋と、近年立てたと思われるコンクリートや白タイルの巨大な家屋とが入り交じっている。平屋の家屋はほとんど人が住まず放置された状態で、赤煉瓦の家屋と白タイルの家屋はちょうど村に半分ずつくらいだった。ナテーの家は赤煉瓦の家で、まだ二階部分が建築中だった。ナテーの夫が仕事の合間に少しずつ建てているのだそうだ。ナテーは農業をして暮らしているが、田植えと稲刈りの時以外はほとんど何もせず、野菜も植えてあるけれどそんなに手間がかからず、あまり忙しくはないのだそうだ。

以下は、ナテーの家での会話である。

「(堀江：どうしてへパと結婚しようと思ったの?) もうそういう年齢になったし、と思って。……姉のナロがラフの嫁として暮らしているのを見ていて、苦しくてやりたくないと思って。前は老外地(外地の男)となんて結婚しない、と思っていたんだけどね。家にいた頃は、警備員¹⁵の男が一人手紙を書いてきて、お話したこともあった。でもその人と結婚しなくてよかった。家にいても食べられるあてがないので。

2005年にここ(江西省)にきて、2006年に生まれた息子を連れて夫と共に帰省し、実家の母を連れて姉ナロのところへ送り込んだ。そして帰ってきて下の子を産み、(産後)数ヶ月のときに下の子を連れて姉のところへ母を迎えに行った。下の子が罰金¹⁶なので姉にあげようかと思ったけれど、かわいそうでやめた。もう笑えるようになっていたからね。

……(堀江：あなたの他にもラフの女性はここに住んでいるの?) ラフはいないけれど、外からここに結婚しに来たものは多い。四川のも一人、昆明のも一人。四川と貴州から来た女性が多い。私より先に来た人ばかり。あとに来た者は少ないけれど、出稼ぎ先で知り合ってくる者が多いね。一人ラフの女の子が売られてきたけれど、子どもを産めなくて夫と喧嘩をして、それで帰って行ってしまったみたい。」

(堀江：今でもラフと連絡することがある?) 連絡取っているのは、中学の時の同級生の女の子で湖南に売られた子と、姉二人くらいかな。」

ナテーは、結婚証も戸籍手続きも完了している。結婚証は、身分証を持っていたので500元くらい出してつくったそうだ。結婚証を作成したとき、身分証を出したところ、「愿意(自分の意志)ですか?」ときかれたそうだ。「このあたりでも女を買う者がいると知っているから」だそうだ。そのときにナテーはイエスと答えた。江西省の戸籍も同じ部局で作ってくれたらしく、村内にこの部局に詳しい人がいて口添えをしてくれたために、費用は500元のみだったそうだ。

ナテーは、漢族夫とは恋愛結婚であることを何度も語ってくれた。

「寒いとき、年越しの後に夫が麻雀ばかりしに行行って朝まで帰らないと、布団を何枚かぶっても寒くて足がかじかんで、「あんたが早く帰らないと足が冷たくて眠れない」と言って、それからは少し早く帰ってく

¹⁵ P村の近くには1996年ごろにアヘン中毒者収容所が建設され、その警備員としてあちこちの若い男性が出入りし、P村のラフ女性の憧れの恋愛対象だった。

¹⁶ 計画外出産の子どもには罰金が課せられる。

るようになった。まあ、自分も麻雀できるようになってからは私もやるけどね（笑いながら）。……テレビなどを見ると、金があっても殺しやいさかいが多いので、夫に向かって、「どんなに金があっても、身体が悪いと意味がない、私たちは二人とも身体が健康でよかったねえ」と言い合っていたんだよ。」

また、出稼ぎをして暮らしている P 村のある男性について話していたとき、「出稼ぎしても、彼は家に帰って家を建てるべき頃だ。みんなそれぞれ根（Awl geu (aw gui)）のあるところに。」とナテーがいうので、「あなたはへパのくくに根が生えたのか？」と私が聞くと、「そうみたいだなあ、（ここの暮らしが）習慣になってしまっただけ。どこにいても友達はできるものだね。（笑いながら）」と答えてくれた。

事例 4 先にへパポイした友人に漢族男性を紹介され、安徽省に嫁いだナウー（30 歳）

最後の事例となるナウーは、安徽省に嫁いだ女性である。ナウーと私が最初に出会ったのは 2011 年の夏、ナウーが里帰りをしたときのことだった。どこに住んでいるのか、との問いに対して、「南京の近く」だとナウーは答えたが、実際には南京から 4 時間ほどバスに乗ったところにある安徽省の農村である。安徽省はラフ族全体ではそれほど多くないが、P 村からの婚出者が非常に多い省のひとつで、上述の三例とは様相を異にする。ナウーの住む村の周辺にはラフ女性が複数居住し、互いに連絡を取り合っている。彼女たちは同一村か近隣村の出身者で、互いに親族であるか、あるいはポイする以前から仲のよい友人である。ナウーの夫によれば、彼の住む県内だけで 30 人は雲南省の女性が居住するそうだが、私は 4 日間ほどの短期間で 6 人の女性に出会った。彼女たちは日常的にラフ語で会話する機会があるのでラフ語を忘れることがなく、非常に流ちょうであった。

ナウーは、安徽省に嫁いだ彼女の親戚女性が 1999 年に里帰りをした際に連れてきた漢族男性と結婚し、安徽省へやってきた。親戚女性が漢族男性を二人連れてきたため、ナウーの親友のナヨと相談し、二人で共に嫁ぐことにして決心したそうである。当時ナウーは瀾滄大地震で父親を亡くし、母方伯父の家で養われていた。母方伯父は当時郷長を勤めるほどの人物で、経済的には苦しくなかったそうだが、学校に行かせてもらえなかったのが残念だと何度も語ってくれた。へパポイを決め、村を出る際には、豚肉を買ってごちそうを作り、ラフの婚礼の簡略化されたものを行い、親に対して 6000 元が渡されたそうだ。安徽省についたあとも簡単な婚礼を行ったそうである。現在二人は安徽省では隣り合った村に暮らしている。ナウーは 10 歳になる息子を持ち、夫と三人で暮らしている。漢族夫の父母は健在だが、村内の別の家に居住している。

以下は、P 村に里帰りをした際にナウーが話してくれたものである。

「ヤミハ（未婚女性）のころは、戒毒場の退役軍人と遊んだり、大隊のダンス場で遊んだり。恋人もたくさんいたよ。（堀江：その人と結婚しようとは思わなかった？）そんな特別な人はいなかった。……地震で父親が死んだ後、当時村役場に住んでいた伯父のところまで育てられた。伯母はへマク（漢族女性）だっ

たし、私も漢語ばかり話すので、他人は私が学校に行ったことがないと言っても信じなかった。へたと恋愛したいラブの女の子たちが、私のところにこっそり漢語を習いに来て、その代わりに米の脱穀などの仕事を手伝ってくれた。結婚してくれと言ってくる人はいたけど、結婚してやらなかった。ラブの男と恋愛したことはない。へたとばかり遊んでいた。ラブの男は結婚するとよく殴るしね。……兄が瀾滄県で車の修理の仕事をしていたから、自分もよく遊びに行き、一人でも怖いものなし。…私がへたと結婚すると言ったら、兄は大反対だった。そんな遠くに行かなくても、瀾滄や思茅で探してもいい、と。でも一般の男はたくさんいたから、その辺の男と結婚するのはいやだった。友だちの連れてきたへたのうち、どちらがいいか親友のナヨと相談して、ナヨは「ナウーの好きな方を選びなよ」と言うので、格好いい方を私が取ったのよ。」

ナウーの住む家には井戸があり、トイレは村の共同である。事例 3 のナテー同様、村内には土壁作りの家屋と、近年立てられた新しい家屋とが入り交じっており、ナウーの家は土壁作りで、それはナウーが越してきてから変わっていないようだ。ナウーの夫はかつて美容師の仕事をしていたことがあり、当時は家族総出で南京に住んでいたが、息子の就学期になって、本籍地以外では学費が高いことが原因で村に戻ってきたのだという。現在漢族夫は左官屋の仕事をしている。2012 年 8 月に訪れた際には、ナウーは夫の職場で労働者に食事を作るアルバイトをしていた。

私がナウーの家に着くと、ナウーは仲のよいラブの友人二人を家に呼んでパーティーを開いてくれた。漢族夫は日中仕事でいないため、ときどきこういう会を開くのだという。自分の持っている電動バイクで市場まで野菜と肉を買いに行き、簡単な料理を作ってビールを飲む。会話は大抵昔の恋人や恋愛話の話だった。P 村にいてヤミハ（未婚女性）だったころ、昼間は野良着を着て水牛の放牧をしても、夜になるとおしゃれな服を交換しあって恋愛をしたこと、親に怒られるのを逃れて楽しんだ恋愛のスリルなどを面白おかしく語り合っていた。「自由」という漢語の言葉を何度も使うのが、他の地域では耳にするものなかった彼女たちの会話の特徴である。「もしここに来なければ、一生村の中で畑を耕し

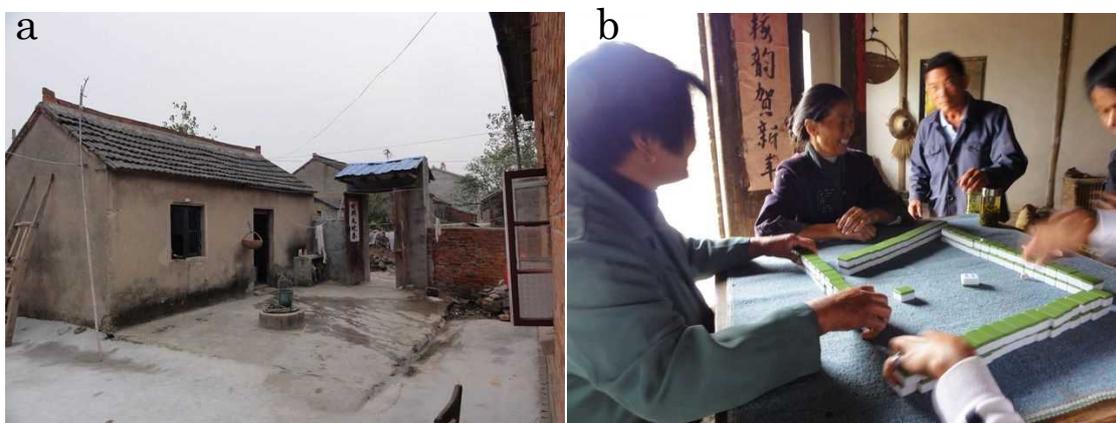


図7 ナウーの暮らし a ナウーの家 b 日々の娯楽に欠かせない麻雀

でそれで終わりだっただろう。一つの選択しかなかった。恋愛をしてはいけないということ以外は、ここは割と自由だよ。」とナウーたちは語ってくれた。ナウーは麻雀が大好きで、麻雀を通じて漢族社会に馴染んでいったようだった。漢族夫たちは、ナウーたちがラフ女性同士で集まることをそれほど嫌がっている様子にはなかったが、それでも家事に影響が出るなど夫に文句を言われそうな状況になると、他のラフ女性に頼んで子どもを預かってもらったり、ラフ女性同士で何かの用事を口裏に口裏を合わせるなど、互いに協力しあっているようだった。

ナウーの舅と姑は、ナウー夫婦と一緒に住んでいないが、毎日必ずナウーの家を訪れ、孫の様子などを見に来ていた。舅と姑がナウーを叱ることは一度もないらしく、「へパは嫁をやるといってもそんなに大変ではない。年寄りが嫁を叱ることはない」とのことだった。しかし、夕食時などに舅と姑がナウーの家にやっても、ナウーや漢族夫が彼らに食事を食べさせることは一度もなく、「へパはラフとは違って自分の家でしか食事をしないのだ」ということだった。この習慣の違いは、安徽省のラフ女性のあいだで「へパはけちだ」という語りとなって現れ、不満の種となっていた。「ラフなら、友だちや親戚であれば家に遊びに行ってそこにあるものをちょっと食べたりしても平気なのに」ということだった。しかしナウーは、「慣習が違うから、へパはそういうものだ」と割り切って付き合っているようだった。

以上、事例が続いたが、四つの事例を通して見えてきたものを整理していきたい。

上記四人の女性は、それぞれへパポイの経緯が非常に異なっている。これらの事例から浮かび上がるのは、「女性の流出」と一口に言っても、その方法や仲介者が誰であるかによって、彼女たちの嫁ぎ先に対する前提知識や心構えは全く異なるということである。漢族仲介業者が連れてきた嫁探し男性と村でマッチングをして結婚していった事例1の三妹は、夫の実家がラフの地域とほとんど変わらないことに驚愕し、「一分一秒もここにはいたくない」と夫に訴えている。また、事例2のナロは自ら村を出て瀾滄県の仲介業者に売られ、村を出た段階ではどんなところに送り込まれるのかが全く分かっていない。「へパは市場でものを買って食べる、そうして暮らしているとばかり聞いていたけれど、違った」と述べている。一方、事例4のナウーは、友人が里帰りの際に連れてきた漢族男性のところに嫁ぎ、友人から婚出先の様子を聞いていたため、婚出先に対するイメージと現実のギャップはそれほど大きくなく、「自由」を獲得するために婚出を決断したと述べている。これはナウーに限らず、安徽省で出会った女性たち全体に言えることである。つまり、漢族仲介業者を経てへパポイするか、先駆者女性のネットワークを通じてへパポイするかによって、婚出先に対する想定は大きく異なるということである。なお、事例3のナテーについては、当初は結婚のためではなく出稼ぎのために村を出て、そこで知り合いから紹介された漢族男性と何度か会ったのち結婚に至っており、他の事例とは異なる。P村の村人たちは彼女を他の女性たちと同様に「へパとポイした」と言うこともあるが、本人は「恋愛結婚だ」と

捉えている。彼女のように未婚女性が単身で出稼ぎに行くことは少なく、特殊なケースと言える。

見知らぬ土地に送り込まれたヘパポイ女性にとって、そこに先駆者の女性がいるかどうかは非常に大きな問題である。事例 2 のナロや事例 4 のナウーのように、嫁ぎ先に先駆者女性がいる場合は、先駆者の家を訪ねて婚出先の暮らし方や気をつけるべきルールなどを学ぶことができるが、婚出先に全くラフ女性がない場合は、なにもかも自分で試行錯誤しないといけない。事例 1 の三妹は、漢語を覚えるまでのあいだは「何も話せない障害があるのではないか」と思われ、連れて帰ってくれる人がいるなら帰りたいたいと思いながら過ごしていた。また、事例 2 のナロも、ラフ女性の友人が他の場所にポイしてしまったときに大きな不安を抱えている。これらに対して、ラフ女性が集中して住む安徽省では、定期的に仲のよいラフ女性たちが集まって食事を取り、会話をすることがあり、他の地域とは大きく異なっている。これも、ヘパポイが友人を通じて行われるか、面識のない漢族仲介業者を通じて行われるかの違いが婚出先での生活に反映していると言えるだろう。

また、ヘパポイ女性の実家と婚出先とのあいだで大きく違うと感じているもののひとつに、夫の父母との関係がある。ラフ同士の結婚においては、「嫁をする Awlkheudma meul ve (Aw hkui ma mui ve)¹⁷」のは大変なことで、夫の父母に対する労働奉仕がしばしば求められる。ナロの言うように、「漢族の嫁をするのは、ラフとは大違い。ラフは水を汲んだり、食事を作ったり、年寄りの面倒を見なくてはいけない。しかし、漢族は、姑がいると、結婚後も苦しくない。何でも舅姑がやってくれるし、食事も用意してくれる、子どもも、授乳したあとはただ姑に渡してしまえば、服を洗ったりおしめを替えたり、すべて年寄りが面倒を見る。」というわけである。ここには、嫁不足のなかでようやく見つけた嫁に対する姑の態度が現れていると考えてよい。しかし、このような姑の面倒見の良さは、あくまでも跡継ぎを生み残すという前提を満たした上であることに注意する必要がある。今回出会った 9 人のうち、男児を産んでいないのは事例 1 の三妹 1 人だけである。三妹は、男児を産んでいないが、彼女の漢族夫は離婚した前妻とのあいだに息子が 1 人いるため、跡継ぎという点では問題がない。その意味で、私が出会うことのできた女性たちは、跡継ぎを残すという期待された役割を全うしたが故に、漢族社会に在ることを認められた女性だと捉えることもできるのである。彼女たちにとっては、嫁姑関係はヘパポイを躊躇する要素にはならず、むしろラフ同士の嫁姑関係よりもよいものと考えられていた。しかし、事例 4 のナウーによれば、ナウーよりも前に安徽省に嫁ぎ、数ヶ月前に広西に再度ポイしてしまったラフ女性は子どもが産めず、姑も舅も彼女を大切に扱わず、姑は「男の子を産まないならこの扉を閉めて入ってくるな」と言ったという。事例 2 のナロの住む村にいたラフ女性も、妹のつてを使って他地域に再度ポイしている。今回の調査では、「再びポイしていな

¹⁷ ラフは、婚後 3 年間は夫の妻方居住（「婿をする」）、その後 3 年間は妻の夫方居住（「嫁をする」）、その後独立するのが理想とされる。現在 P 村では、夫の妻方居住はあまり行われず、妻の夫方居住ののちに独立することが多い。

くなってしまった」ラフ女性の話を 6 人耳にした。その者たちは実家に戻るか、あるいはよりよい嫁ぎ先を探して再移動している。つまり、私が出会った女性たちの背後には、嫁ぎ先の社会に定着することができず、再び「ポイ」せざるをえなかった多くの女性がいるということである。P 村でも、女性が逃げないようにと漢族夫によって柱にくくりつけられたという話を女性の親から聞かされたこともある。彼女たち自身の声は、今回聞くことができなかった。

6. まとめ

中国における女性の遠隔地結婚とそれに伴う移動は、大きな社会問題として中国国内で取り沙汰されてきたが、送り出し社会での長期フィールドワークをもとに、女性の移動を送り出し社会から婚出先まで追いかけて論じたものはない。本報告では、中国雲南省瀾滄ラフ族自治県のラフ族村落 P 村から婚出していく女性に焦点を当て、その時代背景や婚出プロセスの違いを明らかにした。そして、婚出プロセスの違いによって女性の婚出先での分布が異なること、また、婚出先に先駆者のラフ女性がいるかどうかで、婚出先での生活が大きく異なることが明らかになった。

P 村のヘパポイは、1988 年の瀾滄大地震をひとつの契機として起こってきた。初期には漢族仲介業者のもとに赴く／連れて行かれるというかたちがほとんどで、親にとってはある日突然娘がいなくなる怪奇現象であったが、1990 年代の出稼ぎの増大や、嫁探し漢族男性の到来によって、ヘパポイは少しずつ意味合いを変えてきた。実際に嫁探し男性の顔が見えることや、男性から渡される金銭の魅力によって、ヘパポイへの憧れは高まり、親のなかには娘のヘパポイを望むものも出てきた。2006 年以降、嫁探し漢族男性の来訪が制限されたため、ヘパポイ熱は少し収まりつつあると言っている。しかし、仲介者の様々なネットワークはすでに存在し、P 村から「ヘパのくに」への扉は開かれたままである。

ヘパポイ女性は「ヘパのくに」に大きな憧れを抱いて村を離れるが、婚出先では様々な困難に直面する。言語の問題や、漢族の生活習慣、抱いていた憧れとは異なる生活にとまどうことも多い。これらの問題に対峙する際、先駆者のラフ女性の有無は非常に大きい。今回の調査では、ヘパポイ女性の漢族農村における分布に少なくとも 2 つのパターンがあることが分かった。ひとつは、ラフ女性のいない漢族農村に単独で送り込まれる、あるいは近隣に他のラフ女性や雲南省出身の女性がいても、そこに暮らして数年後までその存在を知らないというような状況である。これは事例 1 の三妹や事例 2 のナロが当てはまり、どちらも漢族仲介業者が介在している。仲介業者を介する場合は、瀾滄県まで嫁探しに来た各地の漢族が仲介業者のところをランダムに訪れるため、ヘパポイ女性はそのなかのどの男性に嫁ぐかを判断できないためである。特に、事例 1 のように嫁探し男性が村にやってくるのではなく、事例 2 のように仲介業者のところへ送り込まれた場合は、結婚相手を選ぶ自由はほぼ皆無と言っている。一方、もうひとつのパターンは、漢族農村の非常に狭い地域にたくさんのラフ女性が集中して居住するような状況である。これは事例 4 のナウ

一を含む安徽省の状況が当てはまるが、このような居住パターンが形成される理由は、ヘパポイ女性たちのネットワークによって、友人や親戚など見知った女性同士が連絡を取り合って婚出していくからである。このような方法を採用した安徽省の女性は、婚出先でも定期的にラフ女性同士で集まる機会があるため、他地域に婚出した女性に比べてラフ語が流ちょうに話せた。その意味で、先駆者のヘパポイ女性のネットワークに乗ってヘパポイする方が、女性にとってはよりよい環境に嫁ぐことが可能だということが分かった。

本調査では、ヘパポイ女性たちは跡継ぎを生むという漢族社会の求める条件を満たしている限りにおいて、漢族夫やその父母から大切に扱われているように見えた。しかし、それは、その条件を満たさない女性たちが不当な扱いを受け、再びどこかへ「ポイ」してしまうような状況があることを背景に置いて考えなくてはいけない。今回の報告はあくまでも婚出先に住み続けることができている女性を対象に行った調査に基づいており、ヘパポイ女性の全体像を表したものではないことには十分注意しなくてはならない。とはいえ、本調査で出会った女性たちは、「ヘパのくに」で「嫁をする」ことは、ラフのくによりも楽なものだ、という認識を持っていた。このような認識が、おそらく里帰りの際にさらなる女性をヘパポイに誘う要因のひとつになっているのだと考えられる。

本報告では、主に女性の婚出方法と婚出先の暮らしに特化して報告したため、ラフ族の婚姻規範と漢族の婚姻規範とのずれや、そのなかでのヘパポイの位置づけ、また、婚出した女性と実家との関係、村に残されたラフ族高齢未婚男性がミャンマーに嫁探しに行く現象が起こりつつあることなど、考慮すべき様々な側面が抜け落ちている。また、婚出先の漢族社会もひとつではなく、経済成長や出稼ぎの増加のなかで様々な社会変化の渦中にある。さらに、近年ヘパポイ女性のなかには里帰りをしたまま漢族夫のもとには戻らず、瀾滄県に留まり新たな配偶者を持つ者や、よりよい婚出先を求めて何度もポイするような不安定な生活を送る女性も存在する。これらの、今回の報告では論じることのできなかつた現象については、今後別稿で論じていきたい。

参考文献

- 石井香世子. 2007. 『異文化接触から見る市民意識とエスニシティの動態』慶應義塾大学出版会.
- 王雪玲. 1992. 「雲南婦女以婚姻形式外流浅析」趙俊臣主編『雲南農村婦女地位研究』雲南人民出版社, 280-293.
- 何艷梅. 2008. 「雲南少数民族婦女外流的成因及影響」楊国才、陳星波主編『少数民族女性学学科建设与婦女發展』雲南民族出版社, 266-274.
- 姜麗美. 2011. 「女性生育性別偏好調查研究——基于社会性別視覺的一項研究」『石家庄經濟學院學報』34(5): 100-103.
- 國務院人口普查辦公室、國家統計局人口和社会科技統計司編. 2002. 『中国 2000 年人口普查資料』中国統計出版社.
- 國家事務委員會經濟司、國家統計局國民經濟綜合統計司編. 2004. 『中国民族統計年鑑』民族出版社.
- 蔡慧玲. 2010. 「少数民族農村婦女流動对婚育的影響—以广西融水為例」『雲南民族大学學報 (哲学社会科学版)』27(2): p.56-61.
- 張帆. 2009. 『血濃于水-華北高村漢族的親屬制度』雲南民族出版社.
- 張和生. 1994. 『婚姻大流動——外流婦女婚姻調查紀實』遼寧人民出版社.
- 原新、石海龍. 2005. 「中国出征性別比偏高与計画生育政策」『人口研究』29(3): 11-18.
- 馬健雄. 2004. 「性別比、婚姻擠压与婦女遷移——以拉祜族和佤族之例看少数民族婦女的婚姻遷移問題」『广西民族學院學報 (哲学社会科学版)』26(4): 88-94.
- 楊国才. 2008. 「边境少数民族婦女流動的特徵及变化」『雲南民族大学學報 (哲学社会科学版)』25(6): 46-52.
- Davin, Delia. 1999. *Internal Migration in Contemporary China*. Palgrave Macmillan.
- Fan, Cindy. 1999. Migration in a Socialist Transitional Economy: Heterogeneity, Socioeconomic and Spatial Characteristics of Migrants in China and Guangdong Province, *IMR*, 33(4): 0954-0987.
- 、2002. Marriage and migration in transitional China: a field study of Gaozhou, western Guangdong, *Environment and Planning A*, 34: 619-638.
- Han Min, J. S. Eades. 1995. Brides, Bachelors and Brokers: The Marriage Market in Rural Anhui in an Era of Economic Reform. *ModernAsian Studies*, 29(4): 841-869.
- Lewis, Paul. 1986. *Lahu – English – Thai Dictionary*. Thailand Lahu Baptist Convention. Chiang Mai.
- Ma, Jianxiong. 2013. *The Lahu Minority in Southeast China: A Response to Ethnic Marginalization on the Frontier*. Routledge.